定本陸放詩集

為山義教

奥林

白雲陰之

敍

伊福部隆輝は先師生田長江の愛した青年の一人であるから、わが同門の後輩といふわけであるが、先師の晩年に最もよく仕へ、その薫染の最も多い者である。

彼は社家の出で少年にして郷関を出で、同国の先覚長江先生をたよつて上京したらしい。先生はその才気を愛しこれを導いて詩人もしくは批評家たらしめようとした。その資質を最もよく洞察されたものであつたらう。当年のこの少年は才気喚発、気を負うていささか夜郎自大の風無きにしも非ざりしも、彼には亦才気は超克すべきものであることを知る聡明もあつた。

この少年は中年に達して経世を志し、また老子に傾倒し、姓名を改めて無為隆彦と自称するようになった。この頃であつた、亡き高村光太郎が唐突に僕に問を発して伊福部君の近状は如何といふ。僕は反つて怪しみこの唐突の質問の故を反問すると、光太郎は温容にいささか厳粛の色を加へて、実は亡妻智恵子の弟某は無思慮で稍無頼の傾があり憂慮の種であつたが近時伊福部君の家に出入して、その言行の大に改まるものを見、心私に彼の感化力の大に驚嘆してゐるといふのであつた。即ち僕は伊福部が近来道を見出してこれを楽しむ人となつてゐることを述べると、感激癖のある光太郎は深く肯綮して、この漢、真に敬すべしと称してゐた。

隆彦は近来書道に凝つて自ら日本一と言ふ。曰く天下の書家みな日本一を以つて居り、天下日本一に満つ。何ぞ憚らん我も亦日本一而已と、今自筆の詩稿を影印して上梓せんと稿を携へ来つて僕に示して敍を求める。

僕もと書を学ばず天性の悪筆は何ら鑑識眼もないが、一見するに、その書は予想に反して平凡に他奇なく、素直に自由に書かれて品格賤しからず、彼が弱年の衒氣の如きはみじんも影をとどめない。詩も亦温雅淡懐、初心を失はぬは愛す可く、古典のやうな洋洋たる趣のあるのを見て、彼が能く自らを導いて呉下の旧阿蒙に非ざるを知るとともに、彼の知己光太郎があまりにも早く泉下に去つたのを隆彦のために惜んだ。

書道に詩に明るい光太郎が世に在つたならば必らずやもつと光彩のある敍をこの集のために与へたであらう。

先師と知己既に世に亡く今僕をして不文を巻頭に草せしめるのは思うに僕の誉であつてこの著者の不幸であらう。

昭和三十六年三月十五日

東都目白坂にて

佐藤春夫　誌す

枕花集

桃の花　1

桃の花は　いかに
おほらかで
かげかなくて
どのはなも　どの花も
笑うてゐるような　で
特に　あのお鄙句の
ようもち　餅の上
紅白の菱餅の上に
つせられた　お前を

私はこの年になっても
あなを忘れない
肉太な
頑丈な枝に
しっかりと咲き出る

その薄紅
それは太陽の子のように
力にみちてゐる
特に曙の花びらの中で

お前が一本の炎となって
全身を朝日にふるはせる
から

凱歌

お前自らの
あはれてみつめる

私は見たことがあるが
あゝ あのはのお前は
男であったか
女であったか

美しい桃の花の美しいのは

やっぱり山陰道だね

みるのろと牛の歩いてゆく

そんと調子をあわせて

桃の花は咲いてゐるだからね

千代川は

ゆき

日に白くて

流ぶり流れてゐる

まるで真夏の原さね

桃の花　II

川どんどに
泡だつ泡が
春の日に美しく

山裾の桃の木の
一刷けが
この村をたのしくする
姉さん冠りが
牛を追うて

その年の背に
桃の花があり
その年の誕れに
春の日がたちむれ

その上に国境の
山山の雪が消えて来る
私の因幡の
春である

桃の花

III

春の来るよろこびは
桃の花よりしし
春の暮るるかなしみ
し

また、桃の花より
まことお前は
田螺の粗朴な味を
けてます
そして

川の色に新鮮と夢と
をのこして去る

桃の花 IV

菜の花と
化した畑のつづく
田幡路はよろかな
桃の花は
山裾に一刷け
住吉がのろのろ

てみ間を意ヨのです

桃の花

桃の花のあでやかさには
何か肉体をとってみるや
うなところがある
その人の純さには
桃の花のやうな あでやか
さがある

桃の花の一本が朝霧の中で
日に輝くころは精神をみな
にもえる
そのくが舞台に立ったら
此方桃の一樹のやうだらう

だが花といふが桃は実といふ
ゆさゆさと朱とみどりに熟れ
ああのゆたかさは
初夏の自然のもつ易と

高いものではないか
そのくには知性の美しさは
ないが肉体のもつ精神
の美しさが　桃の実を
つくりだ

今多い海を越して　桃の
花をとずれにしたが
そのかはりそのくをとた
桃の花よりいい　桃の実の方
がいい

嘘

ぞくぞくとうんと　桃の実を
食べてやらう
あつ水蜜をを
多摩川べりの　あの味の
いつかつかを

その一

何とながいお前との道伴
ルビあれう

その二

或るウツツキが死んだ
そしてゞ葬りしたら
何の骨しかこらなかった！
たゝ煙りだけが天にのぼった

あれは燃した本の煙りだって!?
いや それだけは言いえる

その三

閻魔がウソつきの舌を抜いた

そのあとでウソツキはぺろりと
舌を出した

その四

嘘!

何と恥しい言葉であらう

だがマ

何と平近な言葉だと

あらう

小学校にも上らぬ子供

の時から

ついてはならぬと禁じられて

来た言葉でありながら

これほど親んでいたものは

私は私を愛し信頼して

笑えたくらいほど
より多くの変化をついて来て
あるのだ
祖母や父母は言うまでもない
私は最愛の妻や子供にほど
よけいについて来てあるのだ
先輩や友人達との関係も
その嘘をついた関係でしかない
苦しと闇魔がみて
香をもくのならば

私の舌は
何千枚あつて足るまい
六十くりの過去をかへり見て
「でるけれはならぬ」と教へら
れた点寳は

寳ものとしてあるかないか あ
からぬのに
嘘をついた思ひ出は
数限りなく はつきりと
私の生きてゐた道に

「づいてみるのだ
あゝ そんなの 嘘の
何と 恥しい
しかし なんといとしいこと！
私自身の 如く……。

聖

ちゅうかん けん ぽん

人は神を必要とする

神は悪魔を必要とする

悪魔は人を必要とする

おもひで

おとひでのるつかーさは
うらぶりのすてなさてある
かすかすのおがおとひでと
いかにそれらがこの私への
好意とまことしりの
慈愛でありり
友情であったことか
しかし私自身の
おろかさと
すりさと

得手勝手と
感謝の念さえ
如何にそれらをふみにぢって
来てゐることか

だけにそれらの
肉親や
先輩や
友人たちは
その私を知らずに

微笑んで受入れてゐる
その顔顔が私に見える
のだ

あゝ
私はおもひでのすべてのち
っかしさは
すべてわが意表切りのす
てきさである

嘘と
真実

嘘に
ふかくつつま
れてみる
ほど

真実は
うつくしい

しかし

真実に

ふかく

つつまれて

ある

喧騒は

もっと聖く

美しい

むすびの詩

遠かく水の
おーてに
立に

ごとき
わが
苦しみ

名をとゞ

心

あらわれば

時のごとく

情をて

なき

あとがき

けふこころ一つにけりまつにわ
が拙き俳うちより心にわいゆ
つすしものうたを立きしるす

一九六一、三、八　三方路子

巻末小記

老子の流れを汲む東海の道者として、この人生を生きることが、私の生命であるが、詩と書とは、その私の生命をあらはす心と衣粧とでも言はうか。或は又、その私の生命の、詩は故郷であり、書はたどりつくべき理想の国土であるとでも言はうか。

この一巻は、さういう私の、理想の国土の、まことに小さな一つの雛型である。

自らをあらはすものとして学びはじめたのは、詩書ともに二十才頃からであるが、詩の方は早く生田長江先生の指導下に、佐藤春夫、室生犀星二氏の詩風を敬仰して出発し、プロレタリア詩運動（感覚革命、無産詩人）後期自由詩（文芸思潮・第二次感覚革命）文化史派（詩文学）新韻律主義運動（日本詩・浪漫・現代詩）と迂余曲折を経て、耳順の後今日の境涯に到達したが、書の方は本格的に取組んだのは齢不惑を遙かにすぎ、知命に垂んとする頃からで、その年数に於て甚だ若い。詩に於ては長江先生の正統的指導を得たのに反して、書は不惑以前に五六年間権藤成卿翁のもとで翁の書風に接した以外、何等師承なく、ただ自ら好むところに従つて、奔放に毫を遊ばして来たのみで、全くの我流自得である。但し「書は我流自得であるべし」という書箴は自らの発明ではなく、成卿翁より得たところの慈訓である。

所詮、詩書ともに未だ自ら満足する域には勿論甚だ遠いが、しかしともにわが人生の一里塚として世に問ひたいところにまでは来た。但し詩の方はこれだけの量では私の人間を語るに不足するであらう、よつてそれは別に、これに十倍する篇数を収めた「伊福部隆彦詩集」を活版印行してあてる予定である。ここには詩書一体となつた私自身を表現するにとどめる。

なほこの貧しい一巻の為に、この後輩の無躾なる唐突の請を容れて、快よく叙文を賜つた佐藤春夫先生の三十余年かわらざる御厚情には、唯々端坐低頭するほかはない。記してもつて感謝の辞とする

昭和三十六年四月初めの四日

わが庭の牡丹の蕾未だかたき日に

無為草房にて誌す

伊福部隆彦

二百部限定版

中第八六号

昭和三十六年五月十六日印刷
昭和三十六年六月　三　日發行　　非賣品

發行者　東京都練馬區上石神井二ノ一二二五　伊福部隆彦

印刷所　東京都千代田區神田神保町三ノ三　玉川堂

發行所　東京都練馬區上石神井二ノ一二二五　無爲隆彦詩集刊行會
電話　石神井（九九六）一三六一
振替　東京　一四八六五五

文水陸詩集